



## ■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部准教授  
東アジア学科長 小笠原 淳

東アジア学科はフレッシュな一年生を迎えて、2023年度の新学期をスタートしました。新入生は中国語と韓国語の発音・会話・読解の基礎科目を週に各3コマ、計9時間を費やして学び、加えて予習復習、課題をこなさなければなりません。しかし、苦勞よりも新しい言葉に取り組む楽しさが勝っているようです。

魯迅が小説「故郷」のなかで語った「地上にもともと道はない。歩く人が多くなれば、それが道となる」は人口に膾炙した言葉ですが、まさに、一步一步の小さな歩みが道となり、やがて希望を生むのだと思います。

コロナ禍が一応の終息を見て、本学にも海外からの留学生が戻ってきました。台湾と韓国・ソウルの大学でひと夏

### □ ■ □ 学科の最新ニュース！ □ ■ □

東アジア学科の授業風景やニュースなどを学科ホームページで配信しています。QRコードよりご覧ください。

を過ごす、2年生以上を対象とした海外研修も三年振りに再開されます。中国語コースは国立台湾師範大学で、韓国語コースは私立聖公会大学校で海外研修を行います。いずれも語学教育において評価の高い教育機関であり、寮や食事などの生活環境も充実しています。また、本研修プログラムはJASSOの「2023年度海外留学支援制度」に採択さ



台湾留学生と中国語で交流する学生たち

れていて、対象学生には奨学金が付与されます。本研修の一環である事前研修もすでに始まり、学生たちは留学生たちとの国際交流を積極的に進めています。

## □ 研究紹介——韓国社会の多文化化と学校教育

最近では街を歩くと多くの外国からの観光客を見かけるが、コロナ前とは違った変化も感じられる。明らかに日本で生活していると思われる外国の方が増えたということである。近年、外国人労働者の受け入れに関する制度改革が積極的に議論されており、2023年度からは日本語の「特別の教育課程」が小・中学校だけではなく高校でも導入されるなど、外国人児童生徒への教育支援を強めようとする動きが加速している。

韓国においても国際結婚や外国人労働者の増加により、外国人の割合が5%近くとなり、外国人児童生徒の割合も3%（約16万人）となる等、多文化社会への急激な変化が起こっている。最近、調査で訪問したソウル近郊の安山市の学校では、ロシア人と中国人を中心に外国人生徒が90%を超え、入国時の年齢や親の社会的・経済的な状況など生徒が様々なバックラウンドをもつなか、未就学問題や早期離学といった外国人児童生徒の学ぶ権利の保障や居場所の確保が喫緊の課題となっていた。

これらの課題への対応として2006年以降、国は全国一律で公立学校における多文化教育を制度として整備し、また近年では多文化教育に関する教員研修の義務化や授業の必須化など、受け入れ側の改革にも力を入れている。こうした政策には、学校環境の改善と外国人児童生徒への個別の支援という二つの方向性が見られ、韓国語教育の強化

東アジア学科特任准教授 金 美連（比較教育学）

やカウンセリングなどを通じた心理的なケア、進路教育等が重視されている。また、先ほどの安山市では外国人警察官の登用や10カ国以上の外国語に対応する警察署が話題となったが、その他にも完全な分離教育を行う公立代案学校の導入（仁川市）や、地域と学校の連携拠点となる「地域支援センター」の設置（ソウル市）、カリキュラムに一定の自由裁量を認める学校の導入（京畿道）など、地域性を反映した地方独自の取り組みも増えている。

ところで、安山市の学校の入り口で、春の入学式に向け「君が来てこそ学校は春」と書かれたひと際大きな垂幕を見つけた。調査をしていく中で見えてくる外国人の現実というのは、貧困や差別など、社会の構造的な問題そのものであり、閉塞感を感じることもある。しかし、不慣れた環境のなかで必死に生きようとする生徒の幸せを心から願い実践する大人たちを見ながら、ある種の希望のようなものを感じた。このような志をもつ人を、国を越えて繋げることが出来ないか模索していたところ、ソウル市教育行政の提案を受け、今年の夏、日韓の多文化教育に携わる教師のオンライン交流を計画しているところである。微力ではあるが、このような取り組みを通じ、定住外国人を受け入れるホスト社会が着実に変化していくことを願う。

## ■ 「出張日記」

東アジア学科の中国語コースは、毎年の夏休みには台湾師範大学国語教学センターで三週間の語学研修を実施しています。現地での実習に先立ち、毎週一回の事前指導が開始されています。コロナ禍によって、海外研修は三年間中断していましたが、遂に今年から台湾での研修が再開されます。学生たちが台湾現地で使うと想定される会話を知り、それを事前指導に活かそうと、先の春休みを利用して現地調査に行ってきました。

三年振りの台湾に着くと、日本では想像すらできなかった変化に気がつき、何事も現地で体験することの大切さをひしひしと感じました。先ずいくつか大学を訪ね、新しい観光地を見て回りました。台湾師範大学の周囲のお店、レストランや夜市を見学した時、お店の人が師範大で学ぶ日

### 東アジア学科教授 李 珊（中国語語学）

本人学生は上達が早いと話してくれました。日本人がよく行く台湾料理の老舗に行った時、その道 57 年のご年配の店員さんと話をしました。私が日本で中国語を教えていること、私の学生たちがこの夏に台湾に語学研修に来ることを伝えると、彼女はとても喜んでくれ、私がこの仕事を続けられているのは、中国語を学ぶ多くの外国の若者と触れ合う機会があるからだと話してくれました。最後に、学生さんたちが台湾へ来られることを心から歓迎します、と伝えてくださいと言ってくれました。この話には私は感動し、励まされる思いでした。彼女の期待を裏切ることなく、学生たちにはこの夏しっかりと中国語を学んで欲しいと願っています。

## □ 東アジアへのまなざし

以前大英博物館で世界の文明を一望する展示場に立って、改めてイギリスの世界観を知った。眼前にはまず大きな西アジアが広がり、その向こうにインド、さらに中国、そして地の果てに小さく見える朝鮮半島と日本。Far East という言葉を噛み締めながら小さな日本の展示場を眺めた。

ヨーロッパから見た東アジアは、地理的に近接した西アジアと対照される概念であった。一方、日本の近代化の過程で徳富蘇峰などに用いられた「東亜」という言葉は、背景に西欧文化と近代化を意識した複雑なアイデンティティが読み取れるもので、「東アジア」の意味は時代とともにその内実を変えつつある。

現在では東南アジア諸国の発展により、これまで東アジアの向こうに西欧の景色を追い求めていた日本人の眼に、

### 英米学科教授 塩入 すみ（日本語教育）

その中間に広がる広大なアジアの風景が映り始めている。これからは東南アジア、南アジア、そして西アジアの風景も見え始めるだろう。その景色は大英博物館の世界観のような直線的なものではなく、インターネットを含む新たなモビリティによる動的かつ重層的なものであるはずだ。

すでに私たちの生活圏でも確実に風景は変わり始めている。熊本市内の日本語学校の教室を埋め尽くすネパール、ベトナムの学生たち。早朝自転車で工場に出勤するフィリピンの技能実習生たち。だが、彼らは地域の人々にとって不可視の存在である。私たちがアジアへのまなざしを獲得しない限り、どれだけ近くに存在しようとも、彼らは永遠に見えないのだ。

## ■ 新書紹介 堀元見・水野太貴『言語オタクが友だちに 700 日間語り続けて引きずり込んだ言語沼』あさ出版、2023 年

ゆるく楽しく言語のおもしろさを伝える大人気 YouTube、Podcast 番組「ゆる言語学ラジオ」から本書は誕生した。わたしは番組の監修者として、本書の誕生も傍らで見守ってきたが、紆余曲折を経て、やっと世に出ることができた。主に日本語を題材として、普段の番組でのトークと同様、言語の不思議を脱線上等、蘊蓄満載で巧みに愉快に語ってくれる。書名はやたら長いが内容はコンパクトにまとまっており、誰でも気軽に手に取り読み切ることができ



る。しかし、そんな口当たりのよさとは裏腹に、そこで扱われているテーマは「言語学の二歩くらい手前」を目指す番組とは思えないほど、言語学の世界で今も議論されるような興味深いテーマを含んでいる。本書を一度めくれば、必ずや言語が好きに…、言語のことが好きに…、えーっと、「が好き」がいいかな、「のことが好き」がいいかな…、気になったあなたはもうすでに言語沼に足を一歩踏み入れている。

### 東アジア学科講師 黒島 規史（韓国語文法）

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科  
編集人 小笠原 淳（東アジア学科長）  
〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1